

前回の「別稿」との繋がりには申し訳ないが配慮しないで、今回はErik Porgeの論文L'erre de la métaphore(essaim 21, pp. 17-44)の要約をし、これを「別稿、その2」とした。この論文は*Le sintbome*についても連続しているテーマを扱っているため、R.S.I.のアップ(こちらは時系列に準じてであるか)と同時に*Le sintbome*もはなしの説明上先取りして取り上げた方がよいと判断した場合順序不同ではあるが、こちらもアップしてゆく方針である。

Erik PorgeについてはLE NOMS DU PÈRE CHEZ JACQUES LACANやLETTRE DU SYMPTÔME(両本とも *érés*のPOINT HORS LIGNEシリーズのものである)についてもまとめてみたいのだが、こちらの方はやや時間がかかる。小出しにしてアップしてゆくかもしれない。

L'erre de la métaphore, Erik Porge, essim 21, pp. 17-44

R.S.I., 17/11/1974でラカンは「Perre de la métaphoreとはなにか」、「あるシニフィアンから他のシニフィアンへの置き換え substitutionは最大限どこまで許されるか」といった問いを發している。この問いは現実界、象徴界、想像界からなるポロメオの輪のそれぞれを現実の nomination(フランス語のこのnominattionという語は「任命」「指名」【ここからこの権利つまり「指名権」さらには「指名関係者および指名されるポストを通知する文書」】、「任命、指名された事実」を意味し)、これとは別に、dénomination に取って代わられた、英語の naming と同様の語義、「命名」、また哲学において使用される「名指し」についてはもっぱら nomination が当てられている。ポロメオの輪の場合はまずは相互置換が可能な三つの輪にそれぞれに現実界、象徴界、想像界を区別するための nomination が *réel* な領野において行われる事実が前提となっている：小生)。以後、nomination を原則として「名指し」と訳すことにする。

メタフォールはそもそも現実 *un réel* への応えであった

『精神病の可能なすべての治療への前提となる問題について』において、「精神病が発症するには、le Nom-du-Pèreが排除され *verworfen*, *forclos* なくてはならない、つまりこのle Nom-du-Pèreは他者の場所に来たことがないのだが、主体の象徴的反対を押し切ってこの場所に招かれなくてはならない」(Écrits, 1966, p.577)。当時は父親のメタフォールはメタフォールの erre(この語も日本語で示すとなると多義的である。Les non dupes errentの初回のセミナーの小生の説明を参照のこと⇒http://blog.livedoor.jp/ogimoto_blog/archives/cat_34323.html?p=2) についての問題は問われていない。なぜかという父親のメタフォールはまさにメタフォールを限界として、le Nom-du-Pèreの排除が起こらない限界地点として示されているのだから。限界とは排除されたものとしての現実を指定しているのであり、つまりは現実と象徴とのあいだの限界点なのである。

『主体のメタフォール』と題された論文は『無意識における文字の執拗さ(instanceは従来「審級」と訳されてきたが、このinstanceも他の多くの用例と同様、insistanceの意である』の補遺として書かれたもので、『精神病…』と同時期のもの(1957年)であり、ここでのメタフォールの式：

$$\frac{S}{S'_1} \cdot \frac{S'_2}{x} \rightarrow S \left(\frac{I}{S''} \right)$$

も『精神病…』での式：

$$\frac{\text{Nom-du-Père}}{\text{Désir de la Mère}} \cdot \frac{\text{Désir de la Mère}}{\text{signifié au sujet}} \rightarrow \text{Nom-du-Père} \left(\frac{A}{\text{phallus}} \right)$$

を踏まえて読む必要がある。

以下、Porgeは『主体…』からの引用に自らの説明をさし挟んでいる。メタフォールは「意味作用の効果であり、詩とか創作とかの類のものであり」、「連鎖をなしたシニフィアンのあるものから他のものへの置き換わり(といった作用がもとで生み出されるものであるが)、この支えphoreの機能にはなんら自然のものとの定めに従っているものではない」。S'が相殺されることがメタフォールの成功の条件なのであるが、プレルマンも強調するように、「メタフォールは、言うならば、四項からなり、四つとも異質なものであり、分割線によって三対一となり、これはシニフィエに対するシニフィアンの異質性へと分割される」(Écrits, p. 890)。置き換わりは連鎖のなかに余り un reste を残し、これが沁り、脱落する。メタフォールはメトニミーを伴い、«famillionnaire» の機知については、ラカンも指摘しているように、詩的想像とメトニミー的廃棄物、これは抑圧され、それでいて光り輝くものといった二つの面に分けられる(Le formations de l'inconscient, Le Seuil, 1998, p.44)。〈父親-の名〉le Nom-du-Père のメタフォールは象徴的なものが現実的なものと想像的なものに対して優位であった時期のラカンの教えである。父親のメタフォールの式はメタフォール(象徴的な作用の端的な例)と le Nom-du-Père とのあいだの特権的な絆を築くものであった。ヴィクトル・ユーゴーの『眠れるボアズ』において「かれの束の穂は惜しみもなく恨み深くもなく」における「束の穂」というシニフィアンはファロスを含意する生殖力といった観念がBooz(これもzobの回文と看做される)からの置き換わりである。先の三対一がメタフォールのロジックを成り立たせていることから、メタフォールは単なる置き換わりに還元されるのではなく、つまり比較ではなく同一性を生じさせるものなのである。ユーゴーの詩は来るべき父性をメタフォール化し、Boozにとっては遅れてやってくるもの(ラカンはBoozが「排除された」もののように見るとラカンは言っている)であり、さらに父性のメタフォールをメタフォールとしての父性へと結びつける。メタフォールは新たな意味を生じさせるものとしてそうなのである。この結びつきから、ファロスのシニフィアンは〈父親-の名〉le Nom-du-Père に付随する。メタフォールの機能を獲得するに至った父親のシニフィアンはファロスが持つ性的な意味作用をも増補的に兼ね備えることとなる。逆から言えば、ファロスは象徴的な意味作用 signification を獲得するに至り、さらには意味 signification (Bedeutung) そのものになる。

メタフォールから引き離された nomination

〈父親-の名〉とファロスの絆は父親のメタフォールにおいては堅固なものであった。1971年の D'un discours qui ne serait pas du semblant になると、ファロスは〈父親-の名〉から切り離される。

ご指摘したようにファロスは答えていませんでした。わたしが今から声を大にして申し上げることに糸口を見出すこととなるでしょう。それはnom (nameあるいはnoun)のことですが、固有名でなければ多くのことを明らかにすることはできません。nomとは呼びかけるものです。なにを呼びかけるのでしょうか。相手が話すことをよびかけるものです。そこにファロスの特権があるのです。何故かという、懸命に呼びかけてもファルスはなにも言いません。ただし、当時わたしが父親のメタフォールと呼んだものにこのファロスはその意味を与えますし、ヒステリー者はこのことでわれわれを導きます。父親のメタフォールを導入したのは、精神病の可能なすべての治療への前提となる問題についてです。わたしはこの父親のメタフォールを一般的なシェーマと挿入しましたが、これはメタフォールについて言語学が言っているものと無意識の経験で圧縮として示されているものを接合しようとして抽出したものです。わたしはS/S'xS'/s.と書きましたが、同様に「文字の執拗さ」でも書きました。意味を生むものとしてのメタフォールという面に特に依拠したのです。「Waverleyの著者」がある意義Sinnをもっているのは、「Waverleyの著者」が一義的な意味Bedeutungという他のものにとり変わるのは、この一義的な意味をフレーゲがsir Walter Scott という名などで固定できると信じたからです。しかし結局、このアングルにおいてしか、わたしは父親のメタフォールに取り掛かることができませんでした。わたしがどこかで父親-の-名と書いたとすると、それはファロスのことであり[...], それはまさにその時代では他に書きようがなかったからです。明らかなのは、ファロスはもちろんですがともかくも父親-の-名なのです。父親と名指されるものの、父親-の-名は、もしその名前がかれにとって構築物だとして、まさしくだれかが立ち上がり答えることになるのです。シュレーバーの精神病の発病で起きたことのアングル上では、シニフィアンとして母親の欲望に意味を与えることから当然のこととして父親-の-名を持ってきたわけです。しかし、例えばヒステリー者が必要があつてだれかの名を呼ぶとき、その人は喋るから呼ぶのです(下線: Porge)。

ラカンはこちらで初めて父親の名における「話すことの呼びかけ」を狭義のメタフォリックな機能から区別した。後者を精神病の発病の要因としたのだ。父親の名の効力はファロスの意味作用とは別のものであり両者は対立してさえている。なにしろファロスは応えることがないのだから。Nominationの機能は父親のメタフォールから自立し、またファロスに結び付いた指示désignation(Bedeutung)とも区別されるようになった。

この結果メタフォールにおける限界という問題の下地ができあがる。Porgeはこの時点でle nom du pèreはメタフォール(父親のメタフォールはもちろんであるが)にはもはや含まれないものとなったとしている。メタフォールは言語にかかわるものであり、ラカンはこう言う、「言語の用法はどのようなものであれメタフォールへと転向してしまっていることを言語学

者たちが分っていないことは実に奇妙なことです」。「あらゆる表示désignationはメタフォールのです。表示が他のものを媒体として行われるのです」。「ですから指示référentはつねに現実的です。なぜならば表示することは不可能だからです」(D'un discours qui ne serait pas du semblant, Le Seuil, p.45-46)。

メタフォールは言語全体に一般化、通俗化される。例えば愛について、「転移」のセミナーにおいてはエロメノンからエラステスへの置き換わりがあったし、1972年におけるボロメオの輪が最初に現れたときは愛に結びついていた。恋文の言葉の支えは「君に要求する、僕が君に与えるものを拒むことを。何故かという、本当に与えたいものはそれではないから」

メタフォールのerreから如何に現実(R)に到達するか。ボロメオの輪の現実

こうしてメタフォールのerreの問題へと辿り着く。

三つの輪は現実に一体になって離れません。このことはメタフォールにも関係してきますし、そして昨年度においてわたしが意図した意味でのerreとはなにか、メタフォールのerreとはなにかという問題を提起します。というのもわたしの話は象徴的なものに、パロールによってもたらされるに過ぎませんし、この象徴的なもの、パロールが三つの輪のなかに纏りをもっているのも結局は現実的なものによって支えられているからであり、ですからわたしは意味の懸隔l'écart de sensという表現を用いますし、これがそれぞれの三つの輪として特定されるR,I,Sのあいだで受け入れられるのです。意味の懸隔はそこで、最大限度というものが想定されます。意味の懸隔に許されるの最大限度とはなにか。この問いは、今のところは、言語学者にのみにしか提起できません。言語学者に、そのひとり(Jakobsonであろう:小生)は今日においてその高名によりわたしにとっても荣誉なことなのですが、言語学者のだれかにメタフォールの限界を規定できましようか。なにがメタフォールの懸隔の最大限度を規定できるか、わたしが『エクリ』所収の『文字の執拗さ』を指して言っているメタフォールについての懸隔ですが、シニフィアンから別のシニフィアンへの置き換わりの許される最高限度とはなになのでしょう(R.S.I., 17,12,1974)。

ラカンが準拠としているのは1957年の論文であり、メタフォールの定義をシニフィアンの入れ替えに関するものとしているが、これを新たなコンテキスト、新たなパラダイムにおいて捉えるとするとどのような言葉が生まれるのか。1973-1974年のセミナーにおいては、ひとつはerreという語である。ところで«Non dupes errent»とles «noms de père»とは同じ知savoirであるが同じ意味ではないと言いつつこれはラカンにとっても謎であるとしている(Les non-dupes errent, 13 Novembre 1973)。

一方でPorgeは語源的に異なる語が誤って合体するメタフォールの例として、ラカン自身が述べているiterare (répéter繰り返す)とitinerare(voyager旅行する、ここからitinéraire行程というフランス語が派生

してきている)。

人生は旅行のようなものだとするのがnon dupeであり、反復répétitionだとするのがdupeという図式な成り立つ。

ハンス少年の例ではerre métaphoriqueはかれの不安の対象に限られていた。non dupeであるのは限定的であったとPorgeは述べる。

Ferdinand Delignyの自閉症の症例がCévennes(Lieu de vie et d'accueil、日本語でいうと小規模グループホームのような施設であるが、Cévennes - Massif centralに設けられており、写真で見ると建物を取り巻く自然が非常に豊かである)の室内外を歩き回った足跡を辿り線として描きこれを«dignes d'erre»という語を用いた。(Ferdinand Deligny, Cartes et lignes d'erre, L'Arachnéen)。ラカンがこの«erre»を借用しているのは確かであろう。

ポロメオの輪のひとつに現実的という名をあたえると、却ってそれは現実から離れてしまう。名を与えることはある意味を与えることであり、想像的、象徴的といった他の意味に入れ替わることで区別されることになるからである。他の語ととのあいだに意味の懸隔において記載されるからであり、他の意味との入れ替わりであり、これがメタフォールなのである。現実の特徴とはそうでなく、まさに「意味から排除されたもの」(R.S.I, 11 Mars 1975)なのである。ポロメオの輪の平面化において意味は現実の領野の外にあり象徴的なものと想像的なものの重なる領野に見出される。

こうして現実的なものと名を呼ぶと、メタフォールの、象徴的な要素を生じさせてしまう。現実的なもの名を呼ぶとこれと同時に現実的なものを抹消してしまい現実的なものへの到達は禁じられてしまう。

いかにしてこのジレンマから脱することができるのか。メタフォールのl'erreがもたらす問題であるが、これはメタフォールのPRの問題と聞こえてしまう。いかにしてメタフォールのl'erreにおいてPRに到達するか。

現実的なものという語は多義的である。三つ輪のポロメオの輪を現実的と名付けるとこれは象徴的なもの、メタフォールのerreに転落させることになる。他方で三つ輪のポロメオの輪を第一義的に、これに纏まりconsistanceをもたせ、三つの輪のどれにも区別を与えないようなものに関わる現実的なものもある。これは真のPRである。三つが切断という点から同等なもので、繋がっている二つの相互を入れ替えるといった制限をなくし、R, S, Iがもはや意味をもって区別されることなくなるからである。

この後者の現実的なものの例では、言語外ではそこに到達はできず、現実的なものはそれ自体と同一化されるもので、一方でそのことについて何も言うことも、そのことについてなにかを知ろうとすることも許されない。

このジレンマから脱するには、現実的なもの、象徴的なもの、想像的なものを一方で区別しながら、他方でこれらを区別しないという方策をとるしかない。これら三つを、意味なしに、等価のものとして、繋がっていないものとして、その上でなにかを言わなくてはならない。このような要請に応えるため四つ輪が編み出されたわけである。

これら(R,S,Iの文字)が三つであることことから、そのなかのひとつが現実的なものであるとしか言えないのです。この現実的なもの、この三つの文字のどれが現実的と言うに値するのでしょうか。このような論理の次元においては、どうしてもよいことですし意味は数に席を譲り、数

が意味を支配するぐらいにならないと申しあげましょう。支配しても規定してはならないのです。もし現実的なものが、つまり不可能なものがあるとするならば、3という数はそのものとして証明されなくてはなりません。これは極めて困難な証明です。…このことがまさに問題なのです。つまり、結ばれるためにはこれらは結ばれてはならないのです。そしてここに四つめが来る必然性が究極の真理を課すというところでわたしは話を終えたいのです。つまり、四つめがなければ、ボロメオの輪は本当はなになのかといったことに明証性を与えるものはなにもないのです。(ibid., 13, 05, 1975)

四つめのconsistanceである名指し、それは三つの現実的なものがメタフォルに限界を設けるため

「名指す nommerあるいはこうも書くことができます、n'hommerと、名指すことは言うこととdireであり行為でもあります」(ibid., 18, 03, 1975)。四つめの輪は名指す nommant次元の存在を示すのだが、そのものとして現実のメタフォル的な意味とそれら意味外の三つを両立させ、両者を数のうちに入れる。名指しは四つ目の輪として結び目の現実的なものへ包含され、現実的なものを名指しながらこの現実的なものを基礎付けしている三者性を保護する。

四つ輪の結び目においては、三つの輪は互いに拘束されず自由である。四つ目の輪は判然と識別できるものであるが、そもそも三つ輪の結び目において含意されているものであった。しかしその場合も、現実的なものをメタフォルへ還元することなく含意されていたのである。

現実的なものは意味の外、結び目由来の名指しの外であるそれと、象徴的なあるいは想像的なとは区別される現実の意味の名指しといったそれとのあいだで裏打ちされている。名指しによる代補的な次元が加わることにより、現実的なものの名指しあるいは現実的なものそのものの内における結合と解離が生ずる。四は解離の結合を引き受ける。四は分離による繋がりである。

四つ目の輪がもたらす名指しによる解決の結果は重要であるが、その要所における構造と分断について述べることとなる。

-名指における意味の問題-

四つ目の輪も意味の問題を抜きにして考えることはできない。まず最初にラカンはRSIにおいて、この四つ目の輪をフロイトに認められるものとしていながら、フロイトは「バナナの皮を踏んづけて」(これはラカンが好んで用いる表現のひとつである)まんまとしくじったとしている。ラカンによれば、自己のRSIに結びつけてフロイトにおいて四つ目の輪が代補として、その都度、エディプス・コンプレックス(ラカンであれば父親の名となる)であったり、心的現実とされたりあるいは宗教的現実とされたりする。

第二段階として、Le sinthomeにおいて、この四つ目の輪を自ら引き受けて、これを symptômeあるいはsinthomeと名付ける。symptôme、sinthomeはle nom du pèreではなくun nom du pèreを含むものとされる。一方で、四つ目の輪は性的関係の問題と関連して意味付けられ、性的無関係を代補するものとなる。

-三つの名指し-

名指しの行為の存在は押し並べてle direとle ditの懸隔を指し示す。このことはGuy-Félix Duportailが「L'étourdit」を参照として定式化したものである。すなわち、トポロジーでの切断とはle direを忘れないようにする言語におけるle ditであると(Guy Félix Duportail, «Le sujet retrouvé ?», Essaim, 2012/1 (no 28), pp. 69-84, <https://www.cairn.info/revue-essaim-2012-1-page-69.htm>; Jacques Lacan, «L'étourdit», Autres écrits, Le Seuil, 2001, p. 484)。最初の矢印がD'un discours qui ne serait pas du semblantにおいて現れた後に、切断は父親-の-名の単一性l'unicitéを修復不可能にバラバラに粉碎してしまう。

母親の欲望により名指しされた父親にこの父親の不在の象徴が取って代わり、RSIにおいては父親の機能は、ボロメオの輪において、まず名前として、そして名指すnommant父親の機能として穴、更に渦巻く穴を指し示すものとして現れます。「『吾は吾であるもの』“Je suis ce que je suis”、これが穴ではないでしょうか。そこから逆の運動により、というのも穴はわたしの小さなシェーマを信じていただければ、渦巻く穴であり、というより貪り食う穴です。そしてある瞬間、穴は吐き出します。なにをか。名前をです。これが名前としての父親です」(RSI, 15, 04, 1975)。

以上のことから父親のメタフォールが曲面(シェーマRに対する射影平面)に支えられているとすると、名指す父親は結び目のトポロジーに支えられていることになる。

四つ目の輪に認められる名指しの行為は、ボロメオの輪に従って現実的なもの、象徴的なもの、想像的なものそれぞれに割り当てられ複数のles noms-du pèreとなる。更にボロメオの輪を増やしてゆけば、不特定数のnoms du pèreができる(ibid., 15, 04, 1975)。

こうしてRSIのtriplicitéに対する単一性l'unicitéのun nom du pèreは通用しなくなる。名指しの機能は父親-の-名の特権とはもはや言えなくなる。

RSIの最後でラカンが象徴的名指し(N_s)、想像的名指し(N_i)、現実的名指し(N_r)を区別し、それぞれを象徴的なもの、想像的なもの、現実的なものとカップリングさせる。

象徴的名指しとは例えば神の名指しで、創世記における動物各種に対する名付けであり(これは「光りあれ！」により象徴的なものから現実的なものの創世とは異なる)、これは症状と呼ばれる。想像的名指しは制止と呼ばれ、この制止は想像を阻止するものである。最後に現実的名指しであり不安と呼ばれる。特に症状についてはその定義についてさらなる展開が生まれる。

-RSIにおけるl'existence, la consistance, le trou-

四つ目の輪の到来により三者の不可能性がもたらされ、意味の名指しはそれぞれの輪の同一性を粉碎することになる。

新たに三つの語がそれぞれの輪を記述することになる。le trou, la consistance, l'existenceあるいはl'ex-sistenceである。le trouは「侵しがたい」ものであり(繋がりをなさないからである)原抑圧に相当する。la consistanceは輪の纏まりと物質性を示しle trouを囲う。l'existenceはというと、la consistanceの周囲を回るものでありふたつのconsistancesのあいだをなすものである。このあいだ(下線:小生)ではありとあらゆる結び方がある。「l'exsistenceは言うならば、断裂そのものによって想定される領野に属するものである」(ibid., 18, 02, 1975)。

l'existence(l'ex-sistence)はしばしばla consistanceを断裂させ、輪を無限に延びる直線への変形した領野として表される。

-結び目をなすものに由来するメタフォール-

l'ex-sistenceの概念とともにl'erreは別の意味をもつようになり、ボロメオの輪のトポロジーと直接関わることになる。Girard DesarguesのBrouillon Projectにヒントを得て円と無限に延びた直線との等価性について自問するかたちでラカンと言う

円と直線の等価性とはなんでしょうか。結び目をつくることです。ボロメオの輪の結実でして…ふたつのもの(二つの輪と無限に延びた直線)のあいだにはある決まった動きがあり、この動きが必然的に等価性に導かれることから、おそらくこの行程の過程でなにかが円環を閉じさせることで穴を生むことになり、結局のところl'erreの存在、l'erre特有の動きがあることにより、そしてこれが動き回り、差異が一貫性をもって存在の差異として固まることになるのでしょうか。一方のerreはex-sisteし、飛び出してその先には単純なconsistanceとの邂逅だけが待っているが、もう一方のerreとは円環がその中央に穴を据えることです。… L'erre [du non dupe]はわれわれにとって結び目をその存在へと固定する唯一の機会なのです。なにせ結び目は結び目としての存在に他なりませんから。結び目は、混乱のなかにながら締め付けられ固定されるために、結ばれることによるのみ存在可能なものなのですから。

l'erre du non-dupeは道義的判断の対象となるものではなく、いかにこれを用いるかなのである。メタフォールのl'erreについてと同様、ボロメオの輪の観点からこれを用いることで、ex-sistenceのスタートラインをみつける機会が生まれるのである。

結び目を無限に延びた直線への変換について、Sinthomeにおいては次のような問いが聴衆に投げかけられる。「メタフォールの領野において、みなさんはどのような限界を設定しますか」(Jacques Lacan, Le sinthome, 13 04, 1976 ; Le Seuil, 2005, p.136)と。指摘しなければならないことは、無限に延びた直線は無限をメタフォール化するだけでは不十分である。無限に一点を持つことが許されるが一方で円を描くことも可能だからである。

RSIの末尾部分から、l'erre de la métaphoreというものは、1957年の論文にあるシニフィアンの代理のみにだけでなくボロメオの輪にも関連付けられることとなる。

ボロメオの輪との関連でl'erre de la métaphoreが論じられることになると、結び目のl'ex-sistence, 現実的なものとしてのボロメオの輪から、このl'erre de la métaphoreはl'RR de la métaphoreと言い換えられる。

-ボロメオの輪由来のメタフォールとボロメオの輪であるメタフォール-

メタフォールの多義性を整理すると、

- 1) ボロメオの輪のR,S,Iの相互交換性がまずあり、これはmétaphore du nœud borroméenのduが目的格的な意味を持つものとなり、つまり、メタフォールは置き換わりにより、ボロメオの輪をなす。
- 2) ついで、métaphore du nœud borroméenのduが主格的な意味を持つものとなり、メタフォールすなわちボロメオの輪となる。

3) ラカンは1953年以来三つの領野を語り続けてきて、最後にボロメオの輪との関連でこれらが語られるが、数学固有の結び目理論を論ずることとなると話は全く異なったものとなりうる。

症状についての新たな問題提起と象徴的名指しによる補償

1957年『無意識における文字の執拗さ』における症状とは、一種のメタフォールであるが、メタフォールを言うdireことではなくまた一方で欲望とはメトニミーであるとされている。精神分析でいう症状とはメタフォールの二重の引き金の機能によって規定され「そこ(メタフォール)においては、身体あるいはその機能はシニフィアンの要素のかたちをとる」

1975年においては、メタフォールの式(Écrits, p.890)のS1, S2の連鎖を成すことはない。2対2の関係はひとつの三つ(つまりボロメオの輪の三つの輪における関係)に置き換わってしまう。ボロメオの輪における三つからなる現実的なものに対して症状は現実の一部分となる。そこにはシニフィアンと他のシニフィアンとの間の関係はない。シニフィアンの置き換わりではなく輪の置き換わりとなるのであるが、それは二項的交換ではなく諸様態が絡んでくる。例えば「方向性」orientation、「意味」、「輪全体に対する関係」、「切断」をとともなう置き換わりであり、諸症状のかたちでの置き換わりにおいては、結びにおける「間違い」あるいは「欠陥」fauteの「補償」réparationsの証明となって現れる。

-症状と象徴的なもの-

このような文脈からRSIの末尾において、症状とは象徴的名指しと再定義される(図5参照のこと:小生)。

つまり、四つ目の輪は名指しの輪であり、それ自体が四つ輪のボロメオの輪のなかに組み込まれるのだが、象徴的なものの輪と対となってである。

症状はある名指しに与えられた名であり、象徴的なものから生じてくる: $\Sigma = N_s + S$ 。

この流れからジョイスの作品には症状という名が与えられるのだが、その名は改められ *sinthome* となる。しかし症状についてのラカンの概念の変遷を無視して単純化した解説を行うべきでない。

例えば症状の新たな *erre* において陥りやすい罫を見抜くとしてしよう。

Le sinthome の冒頭で、ラカンはボロメオの輪の四つ目の輪を *symptôme* と呼ぶが、RSIにおいては、この四つ目の輪は単に名指しの行為とされているだけであり、フロイトに因んでこれをエディプスコンプレックスあるいは父親の名 *le nom du père* (ティレはない:小生)(図6参照のこと)。

では症状とは新たなかたちの父親の名 *le nom du père* なのか、あるいは父親なしに済ますことのできる、さらには父親を補償する *une consistance* なのか。このことを理解するためにはラカンの話を追って確認するしかない。

症状は *Le sinthome* において *une consistance* なのであるが、RSIにおいては対の輪のカップルによって示されていた。RSIでは症状は象徴的名指しと象徴的なものの組み合わせであったものが *Le sinthome* においては *une consistance* となっているのは確かなのだが、この *consistance* もやはり象徴的なものとの結びつきがあり、この象徴的なものはジョイスに限っていえば *symbole* として表される。

この変化を理解するためには、症状というものが象徴的なものの名指しの機能を二重化し

ている点に着目しなくてはならない。症状は、象徴的なものについて象徴的なものから名指すのである。〈他者〉との関係における父親の名le nom du pèreのシニフィアンについてはこうであった。「父親-の名」le Nom-du-Pèreの排除forclusion (Verwerfung)の原理に言及するとなると、「父親-の名」le Nom-du-Pèreは〈他者〉の場所において二重化されて(下線: Porge)いることに着目しなくてはならない」(Jacques Lacan «D'une question préliminaire …», Écrits, p.578)。シェーマRの象徴的三角の頂点において既に二つの文字AとPを見いだすことができる。あたかも父親の名le nom du pèreの構造において、象徴的なものの二重化が作用しているかのようなのである(図7参照のこと)。

RSIにおいては、症状は象徴的な差しプラス象徴的なものである。作用の分解を通じて二重化の働きを示すことができる。Le *sinthome*において、症状は象徴的なものに結びついたune *consistance*に還元されているが、名指しを二重化するものを分解することは、いわば、暗黙の了解が働いていて、分解されたものは二分割となる。つまりLe *sinthome*において唯一の*consistance*は名指しと象徴的なものに分割されているのである。

「ここでの分割はsymboleと症状の分割です。この分割というならば主体の分割に反映されています(Jacques Lacan, *Le sinthome*, op. dit., p.23)。逆に、症状は父親の名le nom du pèreと等価のものと言うことはできない。父親の名には複数のものが含まれているからである。それでも次のような条件を付け加えることにより、そこには一部の父親の名があると言える。条件とは父親の名において父親そのものよりも名指しによりアクセントを加え、また、象徴的なものが、二重化されてもいるし、主体の分割の反映から、分割されてもいる。

こう反駁することもできるかもしれない。講演「ジョイスと症状」においてラカンはこう言っている「わたしがJoyce le symptômeと言うとき、ジョイスは症状はle symboleとして無効にしてしまったのです。さらに付け加えて言えば、Joyce le symptômeだけでなく、ジョイスとは、いわば、無意識との関係を解約した人とも言えるのです(Jacques Lacan, *ibid.*, p.164)。しかしこれはジョイスという特別なケースなのであり、それゆえJoyce le symptômeといった異名となるのである。こうしてジョイスの試みはle symboleを廃止し、このle symboleを多義性(フィネガンズ・ウェイク)のなかに混ぜこぜにして、シニフィアンの多義性の解釈効果を無力化し、これにより無意識との関係を解約してしまっているのである。ジョイスのケースとは症状が象徴的なものの外にあるケースではなく、ジョイス自身、象徴的なものを利用し、その効果を無力化してしまっているのである。

それゆえ、ジョイスが父親の名le nom du pèreについて証言しているとき、le *sinthome*を最上の位置*coiffe*に据えているとラカンは言う。le *sinthome*は象徴的な名指しとして、父親の名le nom du pèreに結びついた一部分なのである。四つ目の輪が象徴的な名指しであり、父親の名le nom du pèreの一部であり、ジョイスにおいてはこの名指しが父親の名の最上の位置*coiffe*に来ているとラカンは言っているのである。つまり名指しは父親の名の外にあるのではなくles *noms du père*のひとつなのであり、ここにラカンはジョイスの同一化、かれの*coiffe*(第一義的には頭にかぶるもの、主に婦人用の帽子である。 https://images.search.yahoo.com/yhs/search;_ylt=AwrTcdwuvvtBZSGMARf4PxQt;_ylu=X3oDMITByNWU4cGh1BGNvbG8DZ3ExBHBvcwMxBHZ0aWQDBHNiYwNzYw--?p=coiffe&fr=yhs-rotz-001&hspart=rotz&hsimp=yhs-001をご覧ください。StaferlaのLe *sinthome*の冒頭にはジョイスがキャスケットみたいな帽子を被った写真が載せられている。*coiffe*の語源は不

明であるが、cap同様これに関連するcapital, capitale capitaine等、最上位にあるもの、フランス語ではtête、英語ではtopを含意している)に対する個人的な絆を見出しているのである。

-症状による補償-

*Le sinthome*においてラカンは「代補」*suppléance*、「矯正」*correction*、「補償」*réparation*ないし*compensation*という術語を頻回に使用し、これらを症状の作用として示している。これらの語によって症状の名指しにあたる四つ目の輪の存在が考察される。

「代補」という語が最初にあらわれるのはRSIにおいてであるが、ここではフロイトにおいて、心的現実がR,S,Iの繋がりを代補しているとされるが、このR.S.Iでラカンはフロイトに罫を仕掛ける。

*Le sinthome*における「補償」*réparation*、「代補」*suppléance*という語にはフロイトが言う欲動とその抑圧とのあいだの症状の妥協形成の影響を窺うことができる。

「補償」の問題性については、これが名指しから発しているのであるからこの名指しの問題性から切り離して論じるべきではないし、またメタフォールの現実的なものにおける限界における繋がりを無視してもいけない。代補の概念はボロメオの輪のトポロジーに特定される置き換わりの変種である。補償することによりひとつの輪は欠陥に置き換わるがこの欠陥を消滅させる訳ではない。「代補」は1957年における症状としてメタフォールの座標軸に新たに加わったものでありより広範囲の部分をカバーするものである。

「名指し」、「父親の名」*noms du père*、「メタフォール」、「症状」といった術語は、お互いに関連し合うものであるが、その意味、位置づけは結び目のトポロジーとともに変化する。

ボロメオの輪はメタフォールの限界まで押し戻す。三つ葉の結び目に欠陥があり、この欠陥を他の輪が輪の自己交差の欠陥を別の輪により、あらゆる交差において補償できるとなると、これは図の右側の(b)隣、欠陥がその場において補償される、これをラカン補修された欠陥とする。一方で補償が当該の欠陥の場所にないとき、三つ葉の結び目はWhiteheadの絡み目となり、この二つの輪は相互置き換えが可能になってしまう。逆に*le sinthome*の場合は相互置き換えができない(この箇所については*Le sinthome*, 17 Février 1976の読解を近々発表するので、そこでもう少し詳しく述べる)。

メタフォールに限界を設定するもの、それは結び目のもつ特性*nodalité*の現実的なものである。この特性は補償*réparation*によって証明される。結びの特性とは、等価性が成り立つケースでは相互置き換え可となりWhiteheadの絡み目になってしまうのに反し*le sinthome*の場合はボロメオの輪の構造が欠陥を抱えたまま形を変えない点にある。

図9は二つ(の輪)における(ボロメオの)三つである。同様に三つ葉の結び目は一つ(の輪)による(ボロメオの)三つといえる。

症状による補償について纏めると、フロイトおよびラカンの四つの輪、つまりR,S,IにΣを加えた、症状、*symbole*を伴う組み合わせは*Le sinthome*(Seuil), pp.20-21が示しているように、IRSSを1234に置き換えると、1と2および3と4は相互置き換え可能であり、ボロメオの輪の定義に当てはまるのであるが、ジョイスの*le sinthome*はそうではなく、従ってボロメオの輪とは呼べない。

不適切とされるボロメオの輪のメタフォール

四つの結び目により、メタフォールのerreの問題を症状との相関関係において解決を見たようにみえた。このメタフォールの限界は三つと四つとのあいだに位置付けられる。三つ目の現実的なものに四つ目の結び目が暗に示されており、この四つ目がどうにも結び目のできない三つを名指し、自らがそこに加わるかたちでボロメオの現実界を成り立たせている。現実的なものとは「性的関係は存在しない」といった定式に結びつき、これは三つの輪の等価性によるものであり、反対に、四つ目の結び目においてはsinthomatiqueに関係性をもつことになる。というのも、四つの輪のあいだに等価性がないからである。ところが「トポロジーと時間」の1979年1月9日のセミナーの最後でラカンがこう言ったのだ。「ボロメオの輪のメタフォールはその最も単純な例において不適切なのです。メタフォールの濫用です。なぜならば、実際は、想像的なもの、象徴的なもの、そして現実的なものを支えるものなどないからです。性的関係が存在しないこと、これはわたしの話の本髄です。性的関係は存在しない、なぜならば、ひとつの想像的なもの、ひとつの象徴的なものそしてひとつの現実的なものがあるだけで、これを言い出せなかったのです。ともかくこう白状してしまいました。明らかにわたしは間違っていたのですが、未だに軌道修正できていません」と。

なにが起こったのか。検討に入る。

- ピエール・スーリーの結び目による反論 -

このセッションより少し前、おそらく1978年12月末、ピエール・スーリーはラカン宛にいちテキストを送った。そのなかには六つの交差をもつ基準に従ったボロメオの輪には見られない絡み目が提出されている。これは数学者ミルナーのLink groupsに掲載されているボロメオの輪を網羅したもののひとつである。この絡み目は三つの輪と12の交差をもつものである(図11、スーリーの絡み目、俗に絡み目Dと呼ばれる、Pierre Soury, *Chaînes et nœuds*, tome III, texte 140)。

この絡み目は、ピエール・スーリーによると次のような属性をもっている。

- 三つの輪は同じ役割を演じない。鏡像では、一方では1、他方で2と3が入れ替わる。
- この絡み目はいくつかの輪の自己交差点での上下逆転homotopie、あるいは自己交差autotraversementにより鎖は解かれてしまう。2と3が入れ替われば、鎖は解かれる。
- この絡み目はデカルト軸内において2点をもつ。一方で、基準に従った三つの絡み目は6つの交差があるだけで、点はひとつだけである。スーリーによれば、デカルト軸内で1点であることが平面化可能な結び目の基本的特性である、となる。この結び目がラカンの1979年1月9日のセッションにおいてボロメオの結び目のメタフォールは不適切である、と言わしめたのである。かれはこの結び目の特性についてスーリーが述べた言葉の細部には言及していない。ミルナーの計算についても、デカルト軸内の点についても、輪の自己交差点での上下逆転についても言及していないのである。非-等価性がボロメオの結び目における現実的なものを根拠づける、三つが相互置き換わり可能であるとする事への反論となっていることにはラカンも同調している。

メタフォールのerreの問題は現実的なものにおける意味le sens、意味を排除する点から出発していた。ここから現実的なものが象徴的なもの、想像的なものとは区別されひとつの

consistanceをなすこと、また三つの結び目の性質、これら現実的なものの二重の定義に明証性をもたせていた。反論により、ボロメオの輪のメタフォールの問題はその提起そのものからはずされてしまう。ゆえに濫用ということになるのである。

しかしこのセミナーにおけるボロメオの結び目についてのラカンの判断には後日譚がある。まず第一にスーリーは1979年1月9日の直後(1月から3月のあいだにであろう)、ジャン＝ミッシェル・ヴァプローの描いた結び目(図12および13)を見てラカンに、自分の誤りについての謝罪の手紙を認めている。

拝啓

わたしはあなたに対して誤った主張をしてしまいましたのでこれを撤回いたします。この誤った主張でもってあなたも誤った方向へ導くのではないかと案じています。絡み目D(図11)をお送りし、これが絡み目A、三つの絡み目の規範性に反するものと主張してしまいました。わたしの論理的錯誤でした。絡み目Dも三つの絡み目の規範に忠実なものとして初登場となります。…わたしは三つの絡み目の規範性について反論する術を持ち得ません。今回さらにこの規範性が見えてきました。(Pierre Soury, *Chaînes et nœuds*, texte 139)

スーリーはミルナーのLinks groupを読み直して、絡み目Dが絡み目Aの規範性に従うものであること、しかしながら、ミルナーの別のテキスト *Isotopy of links* には、絡み目Dは新たな次元の規範性の道を拓くものとして述べられていることを別の手紙で明かしている。(Pierre Soury, *ibid.*, texte 140)

スーリーの前言撤回についてのラカンの反応は、相変わらず、ボロメオの結び目はメタフォールに不適切であることで譲歩しなかった。二ヶ月後、ラカンはジャン＝ミッシェル・ヴァプローの描いた新たなボロメオの結び目を示し、これに「一般化されたボロメオの結び目」と名付けた。

一般化されたボロメオの結び目による解決

ラカンは例外的な結び目の非-等価性によるボロメオの結び目の規範性の反論に対して肯首していたわけではなく、ある結び目により非-等価性がボロメオの輪の射程にあることを認めたのである。

-切り離しの一般化-

四つ目のボロメオの輪を三つ輪に変形する。次いで三箇所での輪の自己交差点での上下逆転homotopieを行う。結果は輪が三つばらばらになる。一般化されたボロメオの結び目はこの切り離しに他ならず、切り離しにより結び目が消失する。この瞬間が名指しに内在する一種の真理であるということになる。

一般化généralisationについてはこのessaim 21号所収のジャン＝ミッシェル・ヴァプローの論文(Sa clique - Du nœud borroméen fort généralisé - Définition, fonction et champ de la généralisation, Jean-Michel Vappereau, essaim 21, pp.45-66)に詳しく述べられているが、ここでは話が長くなる

ので、別の機会にこの論文について触れることにする。

-症状の一般化-

ボロメオの結び目の切り離しによりメタフォールである結び目、症状としてのメタフォールのPerreの問題は新たな展開を生む。

切り離しと症状の結び目から症状の一般化へといった展開なのであるが、Erik Porgeは *essaim* 27号(2011/2)で *Le symptôme généralisé* というそのもののタイトルの論文を認めている。この論文もいずれ取り上げるが、

*目下小生はR.S.Iを解説していて、*Le sinthome*についてもも折に触れ取り上げる(次回のアップは*Le sinthome*, 17 Février, 1976の予定である)ので、この症状の一般化は先の話である。一般化といえば、*forclusion généralisée*もそうだし、なにかにつけ晩年のラカンにおいては *généralisé(e)* になってゆくがそれらに通底しているものはなになのか。Dossia Avdelidiの *La psychose ordinaire* は読破したが、これについても認めるとなると時間はかかる。

R.S.I.は読みづらいし、これについて書き続けることはかなり骨の折れる作業である。読むほうはかなり先行しているのだが、書くとなると、再度の読み直しとなり、ここで躓くことが多いが、こちらが本筋なのだから辛抱強く続けるつもりである。21, Janvier 1975, 11, Février 1975と書きかけなのであるが、少しペースを上げてアップしてゆきたい。

**ラカニアンは絡み目を *chaîne*, 結び目を *nœud* と呼ぶことが多い。 *nœud borroméen* というときはボロメオの輪の中心にある構造、つまり三つ葉の結び目 *nœud treffle* の構造をさしているとみてよい。四つ輪のボロメオの輪について *nœud* という言葉が出てくるとしたら、本論文でも書かれているようにR.S.I.における四つ輪のボロメオの輪と *le sinthome* での四つ輪(ボロメオの輪とはいえない)では当然構造が違う。ここでは一応訳し分けたが、徹底した訳し分けになっていないことはここでお理りする。ホモトピーについては、一般に位相幾何学で規定されているものと、ラカニアンたちのあいだで使われているものとのあいだには違いがある。ここではJean-Michel Vappereauの *homotopie* の定義に従い「(平面化における)輪の自己交差点での上下逆転」と訳した。

2017/10/02